

1 単装高角砲砲座
坐禅・公案 | 空、光、雨滴

2 台場跡
禅芸術展示・瞑想 | 海、風、石庭

3 連装高角砲砲座
茶室・内観療法 | 森、中庭、鏡

猿島で歴史遺跡と繋がり、禅思想を利用し、心を解放する体験空間を考え、瞑想や坐禅や禅芸術展示などの施設を造る。

猿島の自然風景と遺跡を守る上で、未来の再創生を考えられる。



東京湾に浮かぶ唯一の自然島で、湾内最大の無人島、猿島。かつては東京湾を守る要として砲台と弾薬庫のある“要塞の島”だ。

都会から近いので、便利だ；四面を海に囲まれた無人島で、日常から離れ、分離と孤立感がある；原初からの大自然と刻まれた歴史の跡が時空を越えて共存するので、時の流れや戦争と平和や自然と人間などある種の思考が生まれる。

1. 単装高角砲砲座現場



2. 台場跡現場



3. 連装高角砲砲座現場

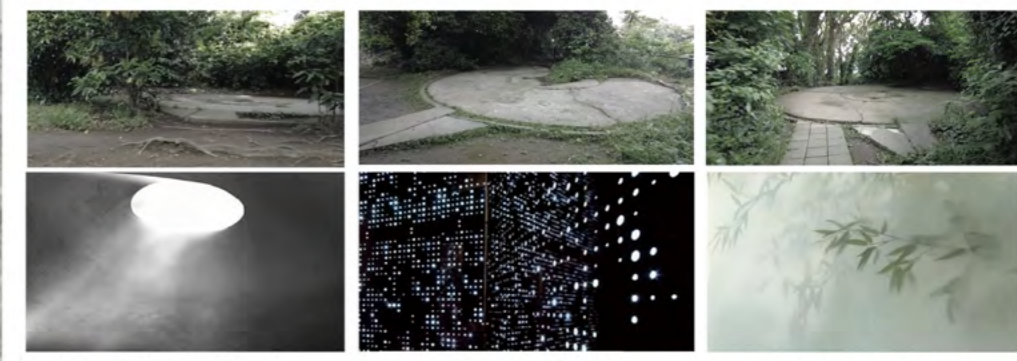


過剰な情報、煩わしい人間関係、承認欲求…
それらが消失した時、あなたが出会う世界とは。
瞑想とは、時間を忘れ、自分だけに集中する行為。
瞑想とは、日常をリセットし、今を生きること。
心身が整い、仕事のパフォーマンスは向上。リラックスして夜はよく眠れる。
他の誰でもない自分を生きるために。
この空間で、今、時間を忘れる。ストレスの高いような普段の生活から解放されて、自然の中で静かな時間を持ちましょう

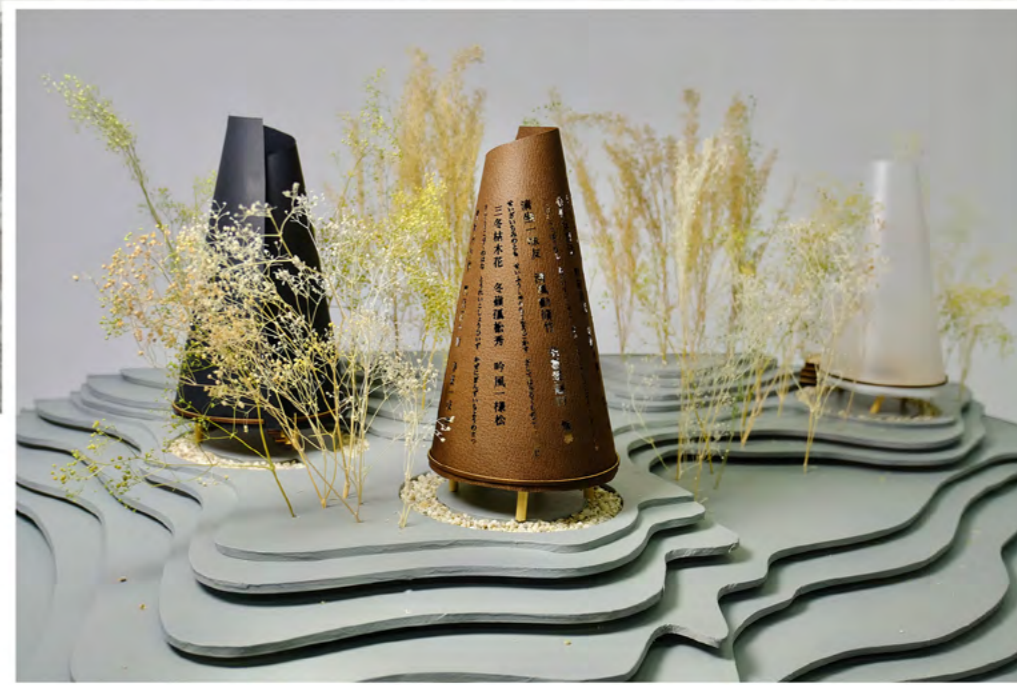
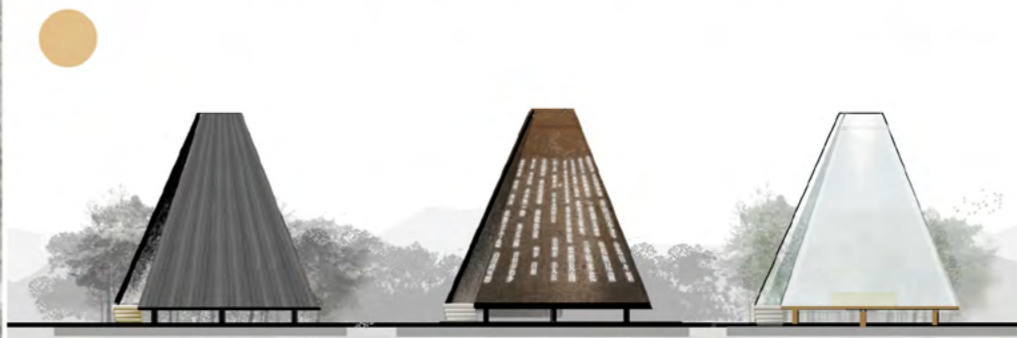


1 坐禅・公案の空間 空、光、雨滴

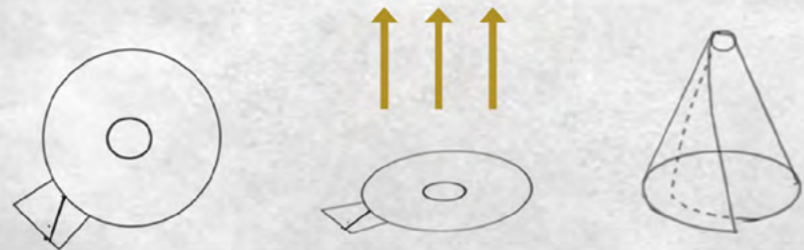
遺跡の砲台跡の形から円錐体空間を作り、遺跡の上で人を座れる空間を架ける。砲台跡を守りながら、坐禅できる空間を構造する。天井と入口から入り込む光で精神を集中できる。光を美しく見せるためには素材も重要だ。そして、視覚から違う素材の壁で光の表現も違うので、三つの体験を考えられる。この空間の中に、大自然の空、光、雨滴を感じられる。坐禅者を1人ずつ包むように覆う、つぶ貝みたい囲む天井の建築だ。周りの反響壁と共に、独特の音の場が形成されます。



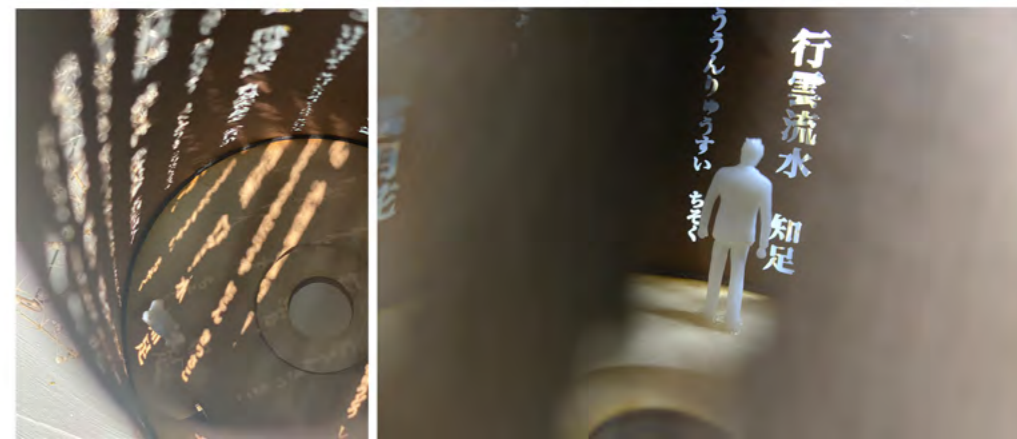
1. 木材、石材やコンクリート 2. 透かし彫り銅板、コンクリ 3. オバルガラス、アクリル



砲台跡平面から坐禅空間へ形の変化過程



猿島は東京湾ののど元に位置するため、海の守りの要として、幕末・明治初期・昭和と3度に渡り砲台が築かれた。黒船がたびたび姿を見せはじめた幕末の頃、江戸幕府は海上防備のため、全国初のお台場と呼ばれる砲台を、猿島に3ヶ所建設し、黒船に対する守りを固めた。以来、猿島は「要塞の島」としての歴史を歩み始めた。明治時代中期、明治政府は東京湾の守りを固めるために、猿島に砲台と要塞を設けた。砲台には敵国の戦艦を迎え撃てるよう、フランスから輸入したカノン砲が配備されましたが、実戦で使われることはなかった。その後、第二次世界大戦の激化とともに戦雲が本土へと迫り、再び防衛施設として重視されることになる。昭和16年頃より鉄筋コンクリート製の円形の砲座が5座造られ、その上には高射砲が配備された。高射砲は終戦とともに進駐軍に解体され、砲台だけが残された。猿島に現存する砲台跡は、この時期のものだ。



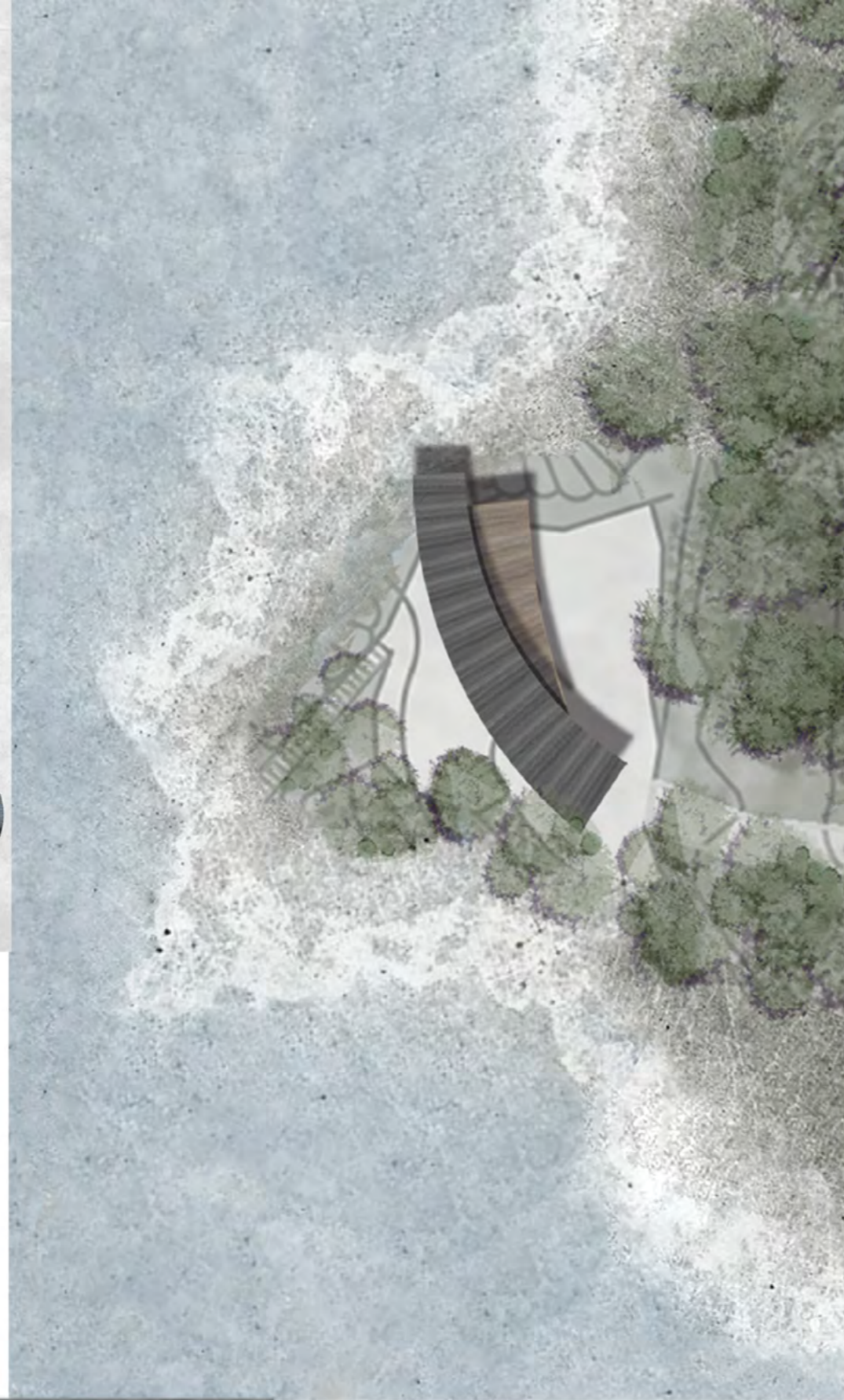
2 禅芸術展示・瞑想の空間 海、風、石庭

天候や時間で刻々と表情が変わる猿島の海。台場跡の現場広場は三方を海に囲まれている。海と近いので、海風、海鳴り、潮煙を見える。海をよく感じられるように、回廊という禅芸術展示できる空間を提案した。モチーフは水曲、山並、潮煙などの大自然の要素だ。この場所で、時間の経過と日々の生活を忘れ、自らの存在に立ち返らせてくれる空間になったと思う。



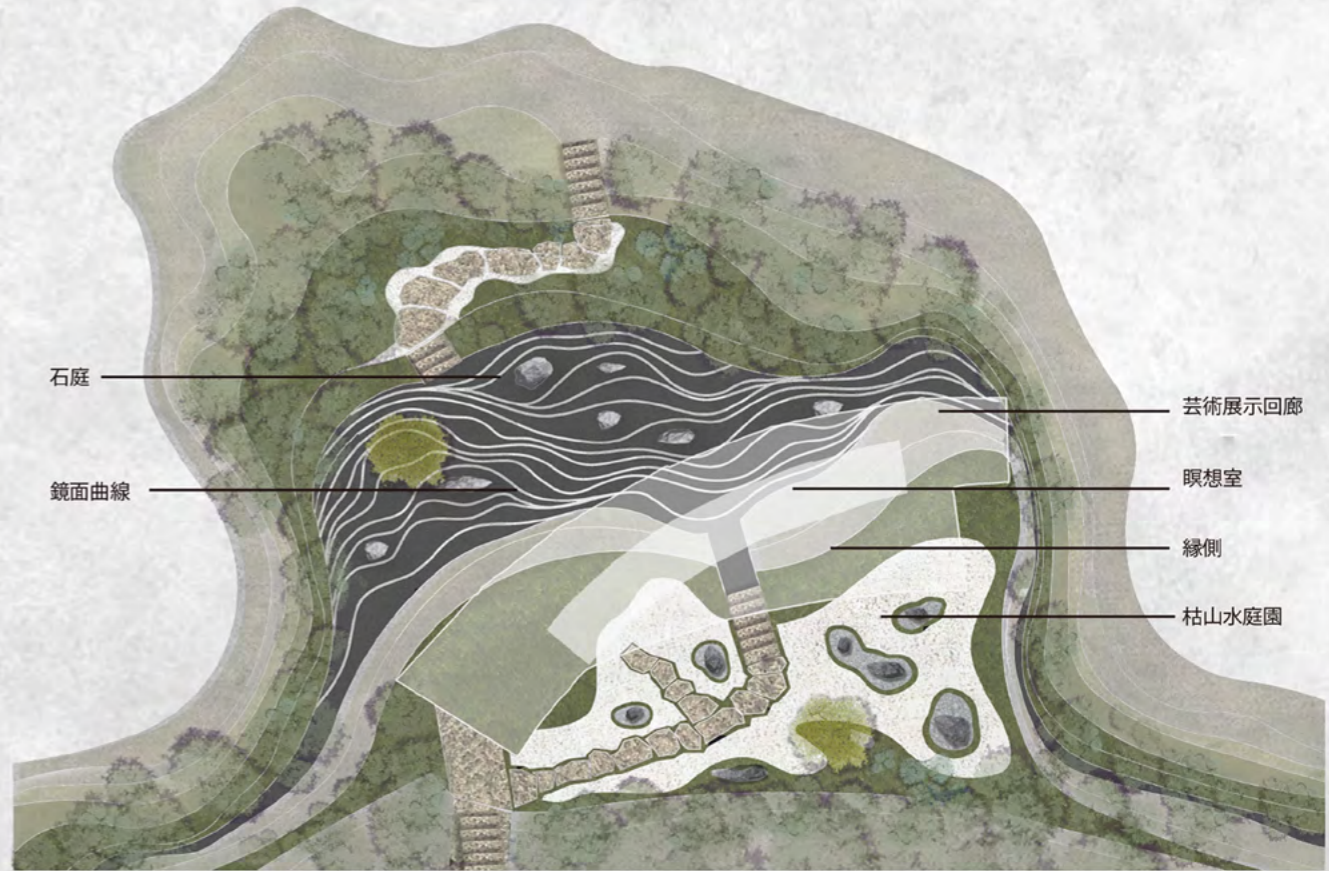
禅芸術展示空間の廊下の外側からの眺めは、海と石庭の景色を一望することができる。そして、回廊は狭いから広がる鏡面柱を配置した。歩くと鏡面柱から、自分の姿が小さい部分からどんどん全部が見られる。一番奥の大開口から海、空という大自然風景が見える。鏡面柱は、自分と出会い、自分自身を見つける意味がある。

回廊の中に、瞑想する空間がある。曲面の壁で曲線の天井から入り込む光が月形の影を映る。光を利用して、精神的に集中することができる坐禅、瞑想空間を作った。



庭園は、2つの庭があって、前庭は枯山水を中心とした庭園、奥庭は石庭を中心とした構成である。石庭は「流れ」を展開し、鏡で作った曲線で水と時間の流れを表現し、過去、現在、未来のつながりを表している。

庭という空間が対峙する人に自然と背筋を伸ばさせ、静寂に身を置くことによって、普段気付かずにいる何気ない風音、鳥のさえずり、木々の香等、これらの存在に気付かさせてくれる。この庭園に対峙する人が語り掛けているものを身体全体で捕らえて頂けたとき、庭園は無限に広がる空間的意味を持つことになり、眺める人の心を清め、明日を生きるエネルギーを生む原動力になることであろう。

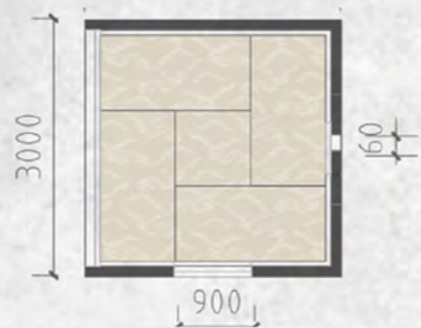


3 茶室・内観療法の空間 森、中庭、鏡

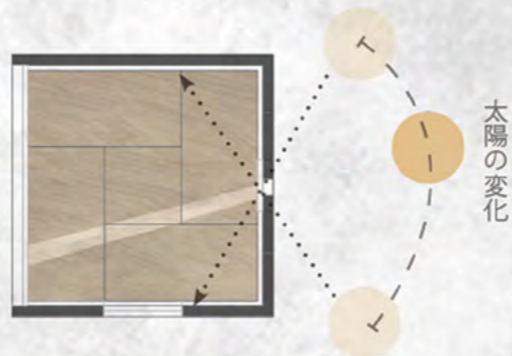
砲台跡の遺跡は円形の沈下空間があるので、現場の植物を利用し、「流心庭」という中庭を考えられる。砲台跡の上で茶室空間を構造する。禅宗の「方丈（一丈四方の意）」から出た四畳半を標準として茶室が庭園を囲むように並ぶ。茶道は、視覚、味覚、嗅覚の体験できる。

茶室には、太陽の軌道を感じることができる空間だ。5つの茶室が中庭を中心に360度回って配置されている。それぞれの茶室の向きが異なり、時間帯によっても変化する陽の光が入るように設計されている。そのため、時の移ろいとともにより様々な表情を見せる。茶室外側の窓から入り込む光は、平面に細い影を映る。時間が経つにつれて、畳の光や影も変化している。この変化は、まるで時計の針のように、空間の中に時の流れを表している。

四畳半茶室：



窓から入り込む光を平面に時計みたいの影：

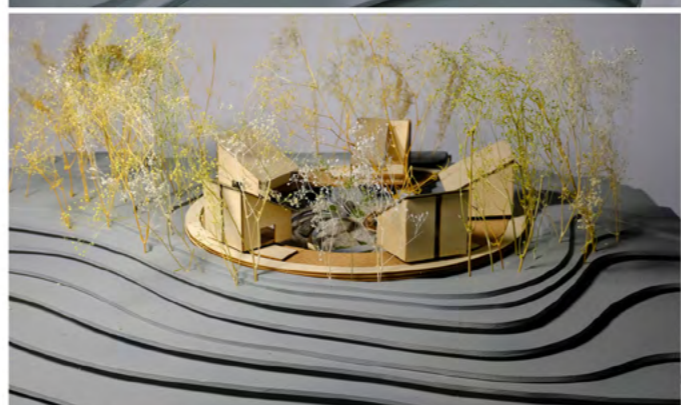


茶室の内側窓から中庭の景色を見える。窓口の形も雪見障子に参考した。

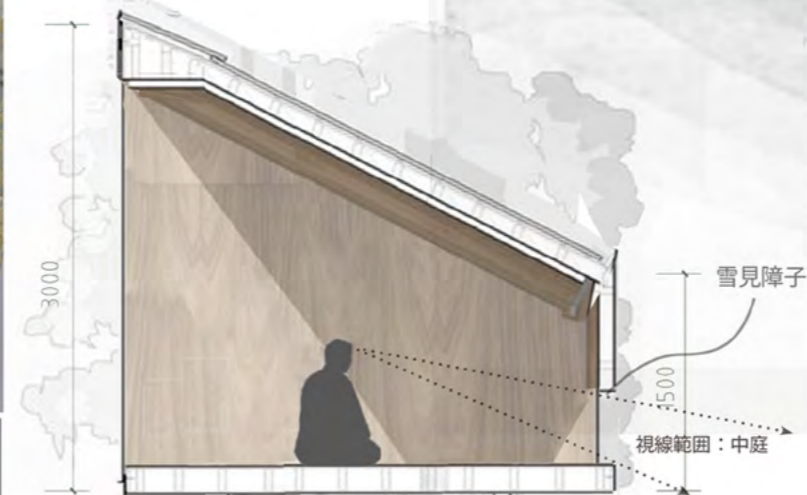


雪見障子

「流心庭」という中庭が鏡で曲水（平安時代の庭園にあった水路）をイメージし、「心」の形を設計した。鏡面は、空や周囲の風景を映してきらきらと輝く。茶室建築と一体の空間となり、人工物と自然が空間を共有し、共生するように佇んでいる。庭園を見ると、大自然についての理解を更に深め、自己や世界の将来を見据え、今をどのように生きれば良いのかを考え、見つめる時間を過さして頂く事を切に望むものである。



砲台跡現場



鏡面素材で心の漢字をイメージした形：



砲台跡遺跡